

## 続・保育の中の小さなこと大切なこと ④ 守 永 英 子

昨年は、驚くほど、子どもたちの間にトラブルの多かったこのクラスも、年長組の二学期が滑り出して、ひと月ほど経つと、平和な日が続いていることに気がついた。

ときどき、けんかがあるにしても、私がしていることを放り出して、すぐに飛んで行かなくてはならないような差し迫った状況が、あまり起こらなくなったようである。

そう思っで見ると、「なるほど」と思えることがらに、いくつか出会った。

このクラスの女兒は、気の強い子どもが多い。H子も、M子も、T子も、その中にあげることができ。そのH子とM子が、その日は、朝から、いっしょに絵を書いていて、仲が良かった。しばらく保育室で絵を書いてから、二人は、ホールに行き、二人だけの遊びを楽しんでいたようだった。そこへ、T子が現われて、「花一もんめをしたいから、一人だけはいって」と誘った。それに応じて、M子が「はいってあげ

る」と答えたところから、トラブルが起こった。

H子は、「M子が、花一もんめにはいったら、自分は、ひとりぼっちになってしまう」と怒り、M子は、「私は、花一もんめにはいりたい」と主張する。

T子のグループが、偶数なので、三人ずつに分かれればよいことに気づかせると、T子は、思い違いに気づき、「もういいわ。ちょうどいいから」と、花一もんめをはじめた。

それでも、H子とM子の言い争いは続いていた。その激しさに、はらはらしながらも、私は、言葉をささむ余地もないまま、見守っていた。

保育室の方の子どもに呼ばれて、用事をすませ気になっていたホールに戻ってきたときに、私の目にはいったのは、花一もんめのグループに加わっているH子とM子の、楽しそうな姿であった。

保育の忙しさに追われて、事の成り行きを見とどけること

が、出来なかつたのが、残念であつた。あとでH子に尋ねると、にこにこして、「だって、はいりたくなつたんだもん」と、あっさりと答えてくれた。

以前であれば、二人とも、泣いて怒り、相手に身体的な攻撃を加えて、とつくにけんか別れに終つていたと思われれる状況である。お互いに、自分を主張しながら、その行き違つた状態によく耐えて、解決まで持ちこたえたものである。

女兒ほどではないが、男児の間にも、やはり、トラブルは起こる。秋びよりの園庭で、遊んでいたK郎が、私の姿を見つけて、とんできた。「T君が泣いてるよ。H君のくつを取つたの」こう言うと、彼は、すぐ、すべり台の方へ戻つて行った。「取られたHでなく、取つたTの方が泣いている」という事情が、よくのみ込めずに、近づいてみると、Hが、しらくけた表情で、そばのつり輪で遊んでいた。私は、解決のいとぐちを、Hの方に求めて、「どうしたの？」と尋ねると、彼は、事情を話してくれた。三人ですべり台で、遊んでいたこと、Tがいれてと言つたこと、満員なので、隣のすべり台を使つたらと言つたら、いやと言つて、Hのくつを投げ、泣いてしまつたこと。

「ひとりじゃ、つまらないでしょうね」という私に、「だから、二人ずつになればいいと思つて、誰といっしょがいい？」と聞いても、泣いてるんだよ」と言う。察するところ、幼いTの気持は、その前の段階で、あとの提案を受け入れられないほどに、こわれてしまつたようである。

「もう一度、聞いてあげれば？」という私の言葉に、Hは、「T君に決めさせてあげなきゃ」と言つて「誰といっしょがいい？」とTに尋ね、結局HとTが、隣のすべり台に移つて、楽しんで遊び始めた。

小さなトラブルの中に見られた、子どもたちの変化の持つ意味は大きい。子どもたちはトラブルを起こしながらも、自分たちで、解決の方向へと、進めて行ける力を、たくわえてきたようである。自分本位なおとながふえてきた、と感じられる昨今、自分のくつを放り出した、相手の子どもの気持を聞き、それを受け入れて、問題を解決して行こうとする態度は、子どもながら、立派ではないだろうか。

平和な日々をささえている、ともすれば、見落しがちな、この小さな芽ばえを、これからも、大切に、育てて行きたいものと思ふ。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)